

〔書評と紹介〕

長谷川 成一 著

『失われた景観―名所が語る江戸時代―』

岩鼻 通明

評者が初めて象潟図屏風を実見したのは、一九八九年七月に秋田県本荘市で開催された北海道・東北史研究会シンポジウムの折りに、本書の著者である長谷川教授のご案内による見学会のことであった。

東北にも、このような近世絵画史料の秀作が存在するということを実感したにもかかわらず、怠惰な評者は象潟図屏風の調査研究に手を着けられないまま、この度、本書の上梓をみたことは、東北在住の歴史地理学者のひとりとして、称賛と同時に悔しい限りであるという偽らざる感慨をまず述べておきたい。

そもそも、絵画史料ないし絵図（古地図）研究は、歴史学と地理学の双方から行われてきた。とりわけ、近年は現地調査を踏まえた大縮尺絵図の研究が盛んになったが、中世の荘園絵図研究がその代表例にあげられよう。我々、歴史地理学者を中心とする研究グループも、近江国葛川絵図などを題材とした調査研究を行って、二冊の著書にまとめた（葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 上・下』地人書房、一九八八・一九八九年）。

しかし、既往の研究の主体は、中世の絵画史料の場合が大部分であり、

量的にはるかに多い近世の絵画史料に関する研究は、たとえば歴史地理学においては故矢守一彦氏の一連の業績をあげることができるものの、全体としては十分とはいいたくない。

その近世の絵画史料に関する初めての本格的な研究書と呼べるのが、本書の最大の意義といえよう。

さて、前置きはほどほどにして、本書の内容を簡単に紹介しよう。

まず、第一章では、「名所の誕生」と題して、日本三景に代表される近世の名所観の歩みをたどり、その成立を考察する。

次に、日本三景のひとつである松島と、常に松島と対比される名所としての象潟を取り上げ、文人たちの残した紀行文から両者を比較し、さらにそれらの名所に居住していた人々の生業と環境をも検討する。

第二章では、「危機に瀕した景観と整備された景観」と題して、日本三景のひとつである丹後国の天橋立が切断の危機に至った経緯を紹介し、一方で、紀伊国の和歌浦においては、藩主の墓所・聖地として景観整備が進められたことを比較検討する。

最後の第三章では、「失われた景観」と題して、景観保存が積極的に行われてきた象潟において、大地震による景観破壊にともない、開発の論理が優先したことを立証し、さらに、従来は作成年代がはっきりしなかった象潟図屏風を新たな視点から、その作成年代と製作の意図を読み解く。

次いで、評者の読後感を述べると、従来の日本近世史の枠組みを超える特徴が随所にみられることを、まず指摘したい。

そのひとつは、近世という時代区分の枠組みを超えて、中世以来の名

所の形成を史料に即しながら丹念に分析していること、さらには和歌浦の場合に、現代の開発問題までも言及する面に新鮮さが存在する。

もうひとつは、日本三景にとどまらず、日本各地の名所を比較検討する、いわば歴史地理学的方法論に立脚している特徴を有している。

これらの分析視点と、絵画史料という分析材料とがあいまって、本書という結実に至ったわけで、研究史上においても今後の展望を切り開いた記念碑的力作と評価できる。

さらに付け加えれば、とりわけ評者の立場からは、丹念な史料の探索と読解に敬意を表したい。従来の研究は、特定の地域における史料の探索と読解はもちろん十分に行われていたのであるが、松島・天橋立・宮島の日本三景に加えて、象潟や和歌浦にまでも現地調査に訪れての史料収集と読解はさまざまな制約を超えてのものであると推測され、地理学者を上回るその行動力には目をみはられるものがある。

また、名所の景観保存という点についても、領主側と民衆側、時には社寺側のお互いの立場を史料から裏付けて整理するという、手際よさの背景には、膨大な史料操作の時間が存在したことが推測される。

それに加えて、名所に居住する地元住民側の史料とともに、旅人の視点からの分析も綿密になされていることがもうひとつの特徴にあげられよう。名所観の形成には、そこを訪れる人々の価値判断が大きく関わっており、その変遷を紀行文や旅日記から拾い集めるという作業もまた、たいへんな労力を要したものと思われる。

地理学の分野においても、紀行文の検討は、たとえば大嶽幸彦氏の『旅と地理思想』（大明堂、一九九〇年）のような先行研究が存在する

ものの、活発に利用されているとはいいたいところがある。ちなみに、評者自身も遅まきながら、出羽三山に関する紀行文や旅日記、および絵図を題材とした分析を、近刊の拙著『出羽三山の文化と民俗』（岩田書院）に収録したばかりである。

最後に、簡単な説明を付加したほうが、読者の理解を得るであろう点についてコメントをしておきたい。それは、本書一四八頁の象潟大地震の際の泥の噴出に関する部分である。この現象は、阪神大震災でも六甲アイランドやポートアイランドなどの沿岸地帯で顕著にみられた、いわゆる地盤の液化化現象であると推測される。したがって、地盤の隆起のみならず、土砂の噴出がみられたことはおそらく疑い無く、実際にそれによる被害もかなり存在したものと考えられる。

以上、誠に不十分な紹介に終始したが、もし誤解や曲解が含まれていたら、それは評者の浅学非才のゆえであるとお許しをいただきたい。絵画史料を通して景観保存の歩みを解明した本書が、歴史学者のみならず地理学者の多くにも読まれることを願って、紹介の任を終えさせていただきます。

（吉川弘文館 一九九六年 四六判 二四三頁 定価二六七八円）

いわはな・みちあき 山形大学農学部助教授